

小布施町並修景計画

建築家・宮本忠長

小布施・町並修景計画。まちのひとびとにとって10年前には想像し得なかった風景。まさに、生活環境の変化である。《まちづくり》というムードが全国的に高まっている折から、このプロジェクトは、県内外の自治体、商工会議所関係の諸団体、建築家、都市コンサルタントの諸関係の人々に強い関心を与えているようである。

施主グループは、一様に、自分達のしたことが、かくも大きな波紋を描いて、全国に席卷していくことに驚く日々である。

モデルとなろうと構えてしたことでなく、結果として、モデルのように評価されているという証左に、施主グループのそれぞれは、満足されているのである。

それは、少なくとも、施主団にとって、計画前より、今日のほうが、すべてが充実している満足感で満ちていることが、何より、この計画の成功を物語っている。

私と小布施との関係性が、この計画の成果のすべてであると思う。

郷里、〈ながの〉を、仕事の基盤にして、建築が地域性との強い影響を、如何なる条件・状況のなかで、受けるかを読み取ることの大切さを識る体験。

地域を表層から観る、或いは、情景として観察することではなく、地域の人々の日常生活の裏側にあって、眼で見えない部分を求めたい緊張性。さらには、人々の地縁・血縁が綴る相互関係。何よりも人々が、地域のどこを愛し、誰を愛し、何に親しむかを確かめたい情念、等々。

建築設計者としての視座が、環境を、私なりに読みとれ得る場所性。これが〈小布施〉のまちである。

環境を識る手段は、地理・歴史から気象状況にはじまって、交通、情報、あらゆる角度からの資料を分析し、判別を繰り返し、一応の環境認知はできるであろう。

しかし、常住している人々の声紋のような個々の、身体のうちがわなど所詮、識り得ない。建築の設計、イメージの組立てなど、常住者の声紋の響きの影に、その風景から、貴い、尊厳性ゆたかなフォームを見つけだすことができる。

斯様な、体感の滲む情景の数々が、こんどの〈小布施町並修景〉ではなかろうか。

企画・立案・完成の3段階を振り返って、略々10年の歳月は決して、長期間の、ゆったりしたスケジュールではない。

この場合、企画の起点があつてのことでなく、小布施町立美術館として「北斎館」の完成。その反響の強さ、まちの風景の変化、それは、単に、視覚効果としての風景の変化でなく、まちなかの人々の〈流れ〉、常住者のみでなく、異質文化さながら、

外来者との混在がかもす風景である。

〈北斎館〉は、まちの〈うちがわ〉から、小布施の黎明期を告げるかのようであった。

黎明期とは、このまちの人にとって、謂わずと知れて、生活環境改善の模索であった。

その、魁として小布施堂がある。小布施堂では北斎館への入館の便を考えて、町がすすめていた駐車場整備に協力する。我が邸(屋敷)を解放し、駐車スペースと、〈ひろば〉の演出を図る。くま姫笹でグラウンドカバーを施し、北斎館前庭のように、緑のオープンスペースを〈まち〉に与えるのであった。

この空間効果は、常住者に、我がまちに潜在する、郷里の眠れる文化価値の実存性を教示したのである。

企画の起点が、はっきりしないという意味は、斯様に、予測、予見性があつて、それがマスタープランとなり図式化され、その敷かれたレールの上を、計画年次を測りつつ走るといふ方式でなく、「畑の中の小さな美術館」の、四辺に広がる波紋のように、その波紋を受けて、反射波形が、お互いに交錯して、そして、予期のし得なかつたまったく別な波紋が出現してくるがように、それが、まったく、当初は予期し得なかつた風景をこのろの〈うち〉〈そと〉にみせているから不思議である。

町並修景計画という題名も、80%がた、プロジェクトが進行し、新しいかたちが見えだし、県内外から、見学者も来訪しはじめてきたことから、地権者=施主グループと、私共が命名したものであつて、決して、10年前には存在しなかつたのである。

これが、マスタープランのない、生活環境改善プランの実体であると思う。

いま、一応の完成をみて約1カ年が経過した。

地権者=施主グループからみても、建築家としての参加の在り様、一つ一つ必要なものを作るその空気の中の海の中にひろがるその波形を、注意深く受け止めるか、または少し、受け流し、さらに、増幅させるかは、まったく、その時々判断、グループの知恵、等々。予期でき得ぬ生活環境の在り様が確かめることのできる生きものに接する感動に、日常生活ゾーンの築かれてきた時間系の偉大さを教えられる。まちづくりとは、大号令をかけて、創成することではなく、サイレントな、アノニマス性を帯びて、小さな単位から生まれる波紋の、無限性に、真の《まちづくり》の手法が存在するのではなかろうか。

確かに、都市機能としての集積の高い、駅前地区、繁華街地区等は別として、(大号令下にモノを作る)人口、1万数千人程度の、地方の小町村の集落にあって、近代文明の恩恵に享受し、今日性の活々としたハイレベルの文化の定着をのぞむ時、〈小布施町並修景計画〉のような方式が、私は正しいのではないかと信じている。

名称/風のひろば(のほりの広場) 所在/長野県上高井郡小布施町大字小布施 設計監理/宮本忠長建築設計事務所 施工/小布施建設 工事面積/約887㎡ 工期/1986年3月~1986年9月

仕上 コンクリート打込み模様洗い出し仕上げ

名称/栗の小径 所在/長野県上高井郡小布施町大字小布施 設計監理/宮本忠長建築設計事務所 施工/池田 工事面積/約230㎡ 工期/1985年2月~1985年5月

仕上 90角栗木レンガ敷き(土間コンクリート下地)